
特集：復興を問いつける ～終わりのなき震災報道～
特集にあたって

笹田 佳宏*

本特集「復興を問いつける ～終わりのなき震災報道～」は、柴田秀一先生の退職を記念して企画した。柴田先生は、日本大学法学部政治経済学科を卒業後、東京放送（現：TBSテレビ、以下「TBS」）に入社し、アナウンサー・解説委員としてご活躍するとともに、2010年からは日本大学法学部校友会常任幹事、日本大学大学院新聞学研究科の非常勤講師を務められた。2017年3月には日本大学法学部新聞学科に移籍し、それまでのご経験を活かし6年間にわたって優渥なご指導をいただいた。深く感謝申し上げますとともに、この場をお借りして柴田先生のこれまでのご経歴、ご功績をご紹介します。

1981年4月にTBSに入社された柴田先生は、報道局アナウンス班に配属され、定時ニュースやワイドニュースなどのアナウンサーとしてジャーナリズム界での歩みをスタートした。1987年からは『テレポート6』で、「東京埼玉連続幼女誘拐殺人事件（宮崎勉連続幼女殺人事件）」事件などを自らが取材しレポートするなど数多くの事件事故を伝えた。1990年には「東京放送創立40周年記念事業」の宇宙特派員計画で、TBS社員の秋山豊寛氏が旧ソ連のソユーズTM11号で宇宙に行く打ち上げの現場実況も担当された。秋山氏は、宇宙船ミールに乗り込んで地球の映像を撮影し、生中継した初の日本人宇宙特派員であった。また、TBSビデオ問題事件でも大きな役割を果たされた。ワイドショー番組「3時にあいましょう」のスタッフが、弁護士の坂本堤氏がオウム真理教を批判するインタビュー映像を放送前にオウム真理教幹部に見せたことで、その後に起きた坂本堤弁護士一家殺害事件の発端となったとされる事件である。この事件でTBSが社内調査を発表した同日の1996年5月13日に放送された3時間半の検証番組「証言・坂本弁護士テープ問題から6年半」の制作に自ら立候補し、事件当時の担当プロデューサー、役員などへのインタビューを行うとともに杉尾秀哉、池田裕行とともに番組の司会進行を担当し、検証結果を視聴者に伝えた。このほか、『ブロード・キャスター』（現『情報7daysニュース・キャスター』）、『ザ・フレッシュ』など数多くの番組を担当するとともに、ニュース担当アナウンサーのまとめ役（デスク）や「TBS放送用語委員会」幹事、日本新聞協会「用語委員会」幹事、TBSラジオのニュース・デスクも務められるなど、放送業界に大きな功績を残された。

日本大学においては、TBSに在職中の2007年9月に「マスコミ就活セミナー」（現：マスコミ・メディア就活セミナー）を校友会のメンバーのテレビ朝日、文化放送勤務の方々と立ち上げた。校友会では、2010年から2017年まで常任幹事も務められた。

「マスコミ・メディア就活セミナー」は、学生が企画・運営するセミナーで、マスコミ・メディア界で活躍する法学部卒業生を招いて、講演や車座座談会を実施し、学生が各業界のことを学ぶと

*ささだ よしひろ 日本大学法学部新聞学科 教授

ともに、就活に生かしていくというものである。2022年9月に第16回を数えるまでに発展し、NHK、山口放送、産経新聞、静岡新聞SBS、ソニーミュージック・エンターテインメントなどマスコミ・メディア界に数多くの学生を輩出している。また、自身のご経験を活かし「法学部校友会アナウンス研究会」（現：アナウンス研究会）も2010年に立ち上げられた。アナウンス研究会は他大学の学生も所属し、2022年度卒業生も含めNHK4人をはじめ民放局など合計23人のアナウンサーを輩出した。

柴田先生は研究面においても精力的に取り組んでおられる。先にご紹介したメディアで使用する用語に関するテキスト『気を付けたい放送表現』や、書籍『メディアによる名誉毀損と損害賠償』『無責任なマスメディア』（共に共著）や、論文「選挙とファクトチェック」「音声合成（AIアナウンサー）と放送の現在」など数多くの業績を残されている。

柴田先生は、この3月でご定年を迎えられるが、4月以降も特任教授として学生、大学院生の指導を続けていただけることになっている。アナウンス研究会も引き続き開講されるとお聞きしている。マスコミ・メディア就活セミナーは、柴田先生から笹田が引き継がせていただいた。新聞学科、新聞学研究科の特徴の一つは、この分野について造形の深い先生とともに、現場出身の先生が在籍していることであると考えている。アカデミズムと現場の双方の視点からジャーナリズムを学ぶことができるという点である。柴田先生にはこれかも現場出身の先生として学生、大学院生の指導の陣頭に立っていただければと念じている。

話が前後してしまうが最後に特集についてご説明したい。日本大学新聞学研究所では、テレビによる震災報道の10年間の全体像を明らかにし、今後の災害報道のあり方や震災を伝えるテレビ番組のあり方、その可能性・課題等を探ること目的とした研究プロジェクトを2020年11月にスタートさせた。本プロジェクトでは、『ジャーナリズム&メディア』の第17・18号、第19号で研究成果を発表してきた。本特集はこのプロジェクト研究の一環でもある。プロジェクトは、財団法人・放送文化基金からの助成を受けて進めており、メンバーは、次の8名である。米倉律、柴田秀一、笹田佳宏（日本大学法学部新聞学科教授）、山口仁、三谷文栄（日本大学法学部新聞学科准教授）、水原俊博（信州大学人文学部教授）、谷正名（NHK放送文化研究所上級研究員・日本大学新聞学科研究所研究員）、古澤健（NHK首都局首都圏ネットワーク編責・日本大学新聞学科研究所研究員）。

本特集では、4本の論考を掲載する。笹田佳宏「震災報道のなかの“復興五輪”とはなんであったのか」、柴田秀一「テレビ自身による震災報道の検証～何が語られ、何が語られなかったか」、三谷文栄「“復興”をめぐるメディアと政治～メディア・イベント論の観点から」、米倉律「テレビドラマは東日本大震災をどう描いてきたか～津波被災地を舞台とした3作品の分析を中心に～」である。また、この2月には柴田先生にもご登壇を頂き、本特集と同タイトルのシンポジウム「復興を問いつける ～終わりなき震災報道～」を開催した。東日本大震災から11年が経過し、メディアや人々の関心が下がっていく中、災害報道のあり方や震災を伝えるテレビ番組のあり方の研究を深め、発表していくことの重要性は高まってくるだろう。プロジェクトは本年度をもって一つの区切りとなるが、これまでの成果を踏まえさらに研究を進めて行きたいと考えている。